

釈迦堂

永観堂の釈迦堂は、1504年から1511年にかけて後柏原天皇（1462–1526）によって最初に建てられ、その後1627年に再建された。お堂の中央には釈迦如来像が安置され、左右に二体の菩薩、右に文殊菩薩(サンスクリット語でマンジュシュリー)、左に普賢菩薩(サンスクリット語でサマンタパドラ)がそれぞれ付き添っている。

どの仏師が真ん中の像を制作したかは定かではないが、鎌倉時代初期（1185–1333）に活躍した非常に才能があった彫刻家、肥後法眼定慶（1184–）の作品に酷似している。比較的小さくとした全体像、平らな長円形の肉髻（サンスクリット語でウシニシャ）と比較的大きめの螺髪は全て宋王朝（960–1279）時代に作られた仏像の特徴を示している。この宋の影響が定慶の作品をしめしています。像自体は非常によく保存されており、金箔（截金；きりがね）のいくつかの部分はまだローブに残っている。

部屋の中央を通る白い小道は、浄土佛教の有力な学者である中国の僧善導（613–681）によって最初に提案された「二河白道図」のたとえを表している。たとえば、盗賊と凶暴な獣から逃げてきた旅人が合流点に到着した。左側は荒れ狂う川であり、右側は火の川であった。これらの2つの川の間には、川の対岸の安全な場所につながるあぶなっかしいほど細くて白い道があった。旅人に、向こう岸から阿弥陀佛が、道を渡るように促す声が聞こえ、背後からは、釈迦牟尼が、道は安全だと保証する声が聞こえてくる。旅人は引き返すこともできず、左にも右にも行くことができず、この頼りなさそうな白い道を信じて前進しなければならなかった。

川の水は貪欲と欲望（サンスクリット語、ラーガ）を表し、火はそのアンチテーゼ、怒りと憎しみ（サンスクリット語、ドベシャ）を表している。これらはともに「三毒」のうちの2つで、痛みの元となる人間が生まれつき持っている欠陥で、悟りを妨げるものである。白い道は悟りへの道を表しており、狭いが、輪廻転生の循環から解脱できる唯一の道である。たとえば話で説明されているように、阿弥陀佛は遠くから、私たちを手招きし、釈迦牟尼は私たちの後ろで、私たちが前に進むよう勇気づけているのである。

釈迦堂の両側の水と火の川の絵は、芸術家の関口雄揮（1923–2008）から寄贈された。

彼はまた、画仙堂の極楽浄土の絵も描いた。